

「帰ってこい、帰ってこい、帰ってこい」そう叫びながら必死で心臓マッサージをする僕の頭の中には、あの日あの時、もう一つの物語が流れていた。

「小さい時はこの子の手を引き、あっちの病院、こっちのお寺、すぎる思いでどれだけ行ったことやろ…人様になんにも悪いことしてないのに神さんなんでこんなことしはってんやろゆうて…しんどいことばかりやったけど、やまなみに行くことになってよかったなあ…頑張るんやで」我が子を見つめお母さんが独り言のようにそう呟いたのは今から 35 年前、菜穂子さんが高等部卒業を控えた春先のこと。以来彼女とは人生の半分以上を毎日共に過ごしてきました。

これまで何体生まれてきたことでしょうか。彼女の掌から姿を現す菜穂子地蔵は、少なく見ても恐らく 3 万体を遥かに超えるでしょうね。その原型となった土人形が生まれた瞬間を僕は今でも鮮明に覚えています。入所間もない菜穂子さんは当時の作業や環境になかなか馴染めず落ち着かない毎日を過ごしていました。変わらない彼女、成長しない彼女、そうした周りのレッテルは当時のスタッフの心にあったに違いありません。変わらなければならないのは、成長を求められているのは彼女ではなく僕たちの方なのに。

既存のやまなみ工房に適應できるかどうか、そういった狭い視野の中に彼女を追い込みたくはない。僕と菜穂子さん、啓吾君と富士川君、そして秀昭君の 5 人はやがて一つの活動班を作ることを許されました。言ってみれば僕を含め、軽作業をひたすら毎日行うことに違和感を抱いていた面々なのかもしれません。ただ何をするかなどと言った明確なプランもビジョンもありません。なにせ彼女が何をしたいのか、何が苦手得意なのかさえわかりません。僕は彼女のことを何も知らなかったし、彼女も僕のことを知らなかったのですから。

それまでの日々は決められた時間に決められた席で決められた作業をする。自由に立ち歩くことやおしゃべりをしたり鼻歌を口ずさんだりすることでさえ躊躇する空気の中、手を休めれば「頑張りや」の声がどこからともなく突き刺さる。社会に適應できるかどうかの前にやまなみに適應できるかどうか、目の前のお仕事をしっかり頑張れるか。ちょっと待てよ、そもそも彼女自身そんなことを目標にしているのだろうか。菜穂子さんは誰かに追いつくために生まれてきたわけでもなければ生きていくわけでもない。「菜穂子さんが」ではなく「菜穂子さんに」適應できない社会とやまなみだただけの話じゃないか。

朝が来るとその日の彼女の表情を見ながら午前中、そして午後のしたいことを決めた。こんなことしたら嬉しいかな？こんな場所に行ったら喜ぶかな？怒り出す日、泣き出す日、もちろん意にそぐわない日もあったけど、今だからわかる。仕事じゃないと言われ続けた一日一日が互いを理解するのに必要な道筋だったと。そもそもパニックなどと言う上から目線の決めつけは、彼女の障害特性が原因なのではなく人間関係の貧しさ、与えられたその場の不快な環境が作り出すということを菜穂子さんから教わった。

ドライブしたり散歩に行ったり、絵を描いたり描かなかったり、以前の決められた日常に比べ彼女の気持ちが穏やかなことは独特のおしゃべりと表情を見て分かった。でも、あからさまに不機嫌になる時間があった。それは周りのみんなが楽しそうに粘土をしているとき。そう、没頭するみんなの中で彼女

だけはいつも表情が曇り、頑なに触ろうとしなかった。

なぜ？僕は彼女がどうしたら粘土を好きになるかばかりを考えさまざまな工夫をした。工夫？いや、彼女にすれば押しつけがましい、ただのおせっかい。粘土を前に彼女のストレスはどんどん増すばかり。にこやかに過ごしてほしい僕はやがて彼女に粘土を促すことをやめ、彼女の意思を尊重した。そして考えた。彼女が一日穏やかに過ごすため自由に振る舞える状況を整えることだけを。

やがて3年の月日が流れた。僕の中には彼女が粘土をするかどうかなど既にどうでもいいことになっていた。

秋の声が聞こえる美しい季節、いつものように散歩に出かけたあの日、僕と菜穂子さんは小道に転がる小さな栗の実を見つけ、ポケットがいっぱいになるまで栗拾いに夢中になった。手作りのアトリエに戻り机に広げた栗の実、菜穂子さんの視線から今すぐ食べたいという思いが伝わり、僕たちは手作りの陶芸窯で火を焚き焼いた。栗は次々に「パン」と音を立て、その弾ける光景を菜穂子さんは興味深そうに隣でずっと見つめていた。そして焼きあがっては食べを繰り返し瞬く間に栗は底をついた。

「栗食べるの」まだまだ食べたい菜穂子さん。その彼女の要求に僕は何気なく言葉をつづけた、「俺の栗なくなったし粘土で栗作ってよ」無理強いするわけでもなく粘土に触ることを期待していたわけでもない。3年ぶりに聞いた粘土の言葉。すると彼女は驚くことにためらいもなく自ら粘土で栗の実の一つ、そしてまた一つ作り始めたのだ。あれほど嫌悪感を浮かべ一切触ろうとしなかった粘土、その粘土で作られた栗の実にはなぜか眉毛や目が描かれ、どの栗の実も笑っていた。

それからというもの、僕は菜穂子さんに「今日はサツマイモ？」「今日はキュウリが食べたいな？」と身近な野菜をリクエストした。怪訝な顔はそこにはない、彼女も粘土の野菜も穏やかな表情を浮かべていた。そっか、僕のすべきこと、僕に出来ることは彼女が自ら自分の意思を表現するまで「待つこと」、何が何でも「待つこと」、そして作りたい時に、作りたいように、作りたいもの、作りたい数だけを作る。菜穂子さんが表現するために必要なのは安心できる時間と空間、そして信頼関係だったんだ。

生まれた土人形は売れるかどうか、実用性があるかどうか、芸術的かどうかなどと言ったくだらないフィルターや人の意見などどうでもいい、とにかく初めて作った人形を真っ先に菜穂子さんのご家族に見せたい一心で自宅に人形を届けた。お母さん泣いて喜んでくれるかな？展開を予想する少し自慢げな僕、ただお母さんが口にしたのは思いもよらぬ言葉だった。

「どうせせんせい作ったんやろ、うちの菜穂子はそんなんしやしません。菜穂子が作ったとかお願いやから人様の前で絶対言わんといてください。せっかく18歳なって働くことできたのに、粘土したり絵描いたり、幼稚園と一緒にすやん。恥ずかしいさかい」

燃えた。

想像もしなかった言葉を前に僕は愕然とするどころか一気にやる気が増した。

ご家族に一番喜んでもらいたい、その思いは変わらない。でもご家族の期待に目を向けるあまり本人が置き去りになるようなことがあれば自分がいる意味がない。

僕が向き合うのは菜穂子さんの気持ち。事實は彼女の心にある。にこやかに過ごす菜穂子さんの姿が

背中を押した。そしてお母さんの言葉はこの先もブレないよう僕を強くしてくれた。

「この人形、うちの娘が作りましてん。かわいらしいでしょ」お母さんからこの言葉が聞けた頃、僕と菜穂子さんは既に 40 歳を過ぎていた。何度も説得を試みたわけじゃない、全国各地で愛される菜穂子地蔵、そして購入してくださった人々から寄せられた菜穂子さんに対するリスペクトの思いがお母さんの気持ちを変えてくれたのだ。「菜穂子は自慢の娘、今日もお地蔵さん頑張ってる作りや」と。

今「8050 問題」と言った聞きなれない言葉が社会問題となっている。「8050 問題」は 80 代の高齢の親が 50 代の子供の生活を支え、生活の基盤をすべて高齢の親が担い、そのため、親に介護が必要になったり、亡くなったりすると社会の支援が届かなくなることを差しているそうだ。菜穂子さんのお母さんは 80 歳近く、菜穂子さんは 50 歳を超えた。あれほど元気だったお母さんもここ 2、3 年は体調が思わしくなく、僕たちは菜穂子さんよりむしろお母さんの支援と日々向かい合った。そして世間で言われている 8050 問題とは少し事情が異なり、母一人子一人、50 歳の知的に障害のある菜穂子さんが、80 歳のお母さんの介護を毎日懸命にしていたのだ。「元気なうちは菜穂子と一緒にいさせてくださいや。菜穂子が家にいてくれんと私あきませんねん、なにも出来ませんねん」その思いを守るために。お母さんの言葉通り、どちらかがいなくなれば一気に生活が立ち行かなくなってしまう可能性が懸念される。お母さんの身の回りの負担や不安を解消するため、そして菜穂子さんの生活を守るため僕たちは毎日出来る限りのことをした。通院介助、病院の転院、ご親戚とのやり取り、ヘルパーの手配に日常の安否確認、そして買い物、危険が生じ始めた車の運転を静止するため何度も話し合ったときには別人と化したお母さんから暴言を浴びせられた。歩くのもままならないお母さんは車で菜穂子さんの大好きなかき氷を買いに行きたかったんだよね。

菜穂子さんとお母さんの頑張り、そして家族の絆。不安を抱えながらもご関係者の協力のおかげでさやかな日常生活を無事に過ごした。

当たり前のように毎週やってくる月曜日、いつものように送迎バスは菜穂子さんの自宅に到着した。その日はなぜかいつも自宅で待っている菜穂子さんが外でバスを待ち、到着するや否や飛び乗った。それでもスタッフはいつものようにお母さんの様子を確認するためバスを降り自宅にいるお母さんに声をかけた。いつもであれば 2、3 回お声がけすると必ず返答があるはず。不審に思い覗き込んだスタッフの先には倒れたお母さんの姿があった。すぐさま救急車を呼び、同時に僕の携帯が鳴った。いつもなら同じ時間帯に「お母様、今日もお元気です」の LINE が鳴るはず。ただ事ではないことを察知した僕は状況を確認しながら車に飛び乗った。いつもなら 10 分もあれば到着する彼女の自宅、この日はその距離がとにかく長く感じた。救急車はまだ来ていない。先に対応をしてくれていたスタッフと変わり僕は必死で心臓マッサージをした。

「帰ってこい、帰ってこい、帰ってこい」

その声は目の前のお母さんに届くことはなかった。救急隊員の説明によると死後 2 日が経過していた。金曜日の夕方には元気な声で菜穂子さんを迎えてくれたのに。とっさに僕は考えた、2 日間菜穂子さんはどんな思いでどうやって過ごしていたんだろう。誰にも頼ることが出来ず、伝える手段も理解出来ず。悔やんでも悔やみきれず自分の非力さに涙も出なかった。お母さんは最後どんな思いで逝ってしまった

のだろう。

あれから1か月、たった一人の家族であるお母さんの死を菜穂子さんがどう理解しているかは勝手な想像でしかない。ただその日を境に帰れるはずの自宅に戻ることが出来ず、お母さんと会えない孤独を受け入れるため必死で戦っていることだろう。

庭先の納屋の片隅にはお母さん手製の菜穂子ギャラリーが出来ていた。200体近くの菜穂子地蔵を前にしながら、訪ねてくる方々に菜穂子さんのことを自慢している光景が目につかぶ。

菜穂子さんとずっと一緒に過ごせることを今まで疑いもしなかった僕、家からやまなみにずっと通いたい、菜穂子さんもそう思ってくれていると信じたい。

近い将来その思いが叶わなくなるのであれば、それは全て僕の責任だ。元気なお母さんの口から一度だけ聞いたことがある。「せんせい、私になんかあったら菜穂子のこと頼むわな」思い出すのは菜穂子さんに向ける元気なお母さんの微笑み。

彼女の掌から毎日生まれる「菜穂子地蔵」これからも増え続ける光景を真横で見たい。菜穂子さんと僕の歴史はまだまだ終わりにしたくない。このままじゃいけない。その気持ちとは裏腹に今の僕にはそのことを解決するための具体的な手立てがない。僕の想像を絶する不安と苦しみの中にあるお二人にどうか一言お伝えすることお許してください。

菜穂子さん、お母さん、本当に本当にごめんなさい。

この状況を打破することができない自分が腹立たしい。